
俺の帰宅部生活

ヤシロ ユウイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の帰宅部生活

【Nコード】

N2740V

【作者名】

ヤシロ ヌウイ

【あらすじ】

俺の所属する部活は、キタク部。そこは、変な人たちのたまり場だった。そこに入った瞬間から俺のキタク部生活が始まってしまった。

入部（前編）

この学園には、『帰宅部』が存在している。もちろん、普通に部活に所属していない生徒が自動的になる帰宅部ではない。正式にはカタカナで、『キタク部』らしい。

担任が朝言っていたには、部活は強制ではないと言ったことだったが、ただの興味に導かれてここにいる。キタク部の部室の前に。

（キタク部。何をするとところなんだ？帰宅部よりも速く帰る部とか？）一人で考え込んでいる内に、人が近くに来ていことにまったく気づかなかった。

「もしかして、入部希望者かい？」

「あつ。イヤ、別にそういうわけではないんですけど」

突然話しかけられて少し驚いたが、すぐに落ち着きを取り戻した。そういうことには慣れている。

「そうか、残念だな」

まったく残念そうな言い方をせずに言った。

「だが、少しでも見ていくがいいさ。歓迎するよ」

「えつと、じゃあ、少しだけ失礼します」

と、キタク部の部室が開かれた。もし、過去に戻れるのならこう言いたい。「そんなところに行くんじゃないと」

「二人とも、新入生が来たぞ」

中には、二人の生徒がいた。一人はおとなしそうな、女子生徒だ。もう一人は、思いつきりくつろいで足を投げ出していた。まず目に付くのが、髪の色だ。茶髪。完全な茶色をしていた。あと、見た目がやけにいい、いわゆるイケメンと言うやつ。だと思う。（男の視線で見ではあるが）

「新しい人ですね。ここも狭くなりそうですね」

女子生徒のほうが言った。今気づいたのだけど、この女子は3年生らしい。

「男ですか。僕以外でここに来ようなんて、自分で言うのもなんだけれど相当変わってるね。キミは」

「どういうことだ。この人は2年生のようだ。」

「まだ、入部するわけではないらしい。残念ながら」

「そうですね。残念です、僕以外の人がよく入ったと思ったのに」

「残念です」

「しかし、ここに来たということは素質があるということだと思っ
が？」

「まあ、確かにそうですね」

「ところで、ここって何をやる部なんですか？」

「根本の問題だね」

「なんか。すいません」

「いや、大丈夫だよ。部長、僕が説明しますね？」

「部室の前で後ろに立った女子生徒がどうやらこの部の部長らしい。
簡単に言うと、何もしないかな」

「えっ？」

「その言い方はあまり正しいとはいえないな」

「ですよ。何もしないわけが……」

「まあ、たいしてやることは無いのだが」

「無いのかよ!!」

「思わずつつこんだ。」

「部長。もしかしてこれは……」

「やはり、貴重な人材」

「珍しいです。あまり見ないタイプの」

『ツツコミ!!』

「3人が見事に言った。まさに、シンクロナ率100%。」

「な、何なんですか？」

「いや、あまりにもすばらしいツツコミだったから。少し、感動し
ちゃって」

感動って、どんなレベルのツッコミだったんださっきの？

「入部許可!!」

「いや、だから入ると決めたくわけじゃないって!!」

「おめでとう。ぼくは、2年の三島みしまみつき美月」

「わたしは、3年の北野 あかりです」

「ふつ。そして、私がこの部の部長、今井 清。声優になるために毎日声優学校のパンフレットを見ている」

「いや、見ているだけですか」

「そう、ただ見ているだけだ」

「何なんだ。この人は？もしかしてこの二人も。」

「ん。僕は普通だよ」

「こいつは、どっちもいける変態野郎だ」

「どっちもって……」

「一番危険な人だった。」

「ふっふっふっ」

「ちなみにこつちが」

「二人のからみ。興奮してきたー!!」

「二人似てるじゃないですか」

「失礼だな。どっちもって所は重要だよ？」

「変態に変わりは無いですけど」

「まあ、この二人が変態なのは置いといて」

「一番気にするべきところな気がしますけど」

「ところで、君の自己紹介がまだだったね」

「ああ、そうでしたね」

あまりの衝撃の多さに忘れていた。

「黒崎です」

「はっ。まさか、死神か!？」

「いや、違います」

「詐欺師のほうですよ」

「そっちでもないです」

「まさかの、父の方が」
「違います。黒崎^{くろさき} 智紀^{ともき}です」
「まあ、とりあえず入部おめでとう」
「だから、入部するなんていってないです」
「とりあえず、体験入部みたいな形でいいんじゃないかな？」
「そうね。三島君の意見の通りに体験入部を許可します」
「まだ、何も言っていないんだけども。」
「じゃあ、今日は終わりで」
「えっ。何もしてないと思うんですけど？」
「そう、言ったとおり何もしないんだ。まあ、趣味の話をするくらい場所だな」
「あんな感じの話を毎日していると」
「入りたくなっただろう？」
「何ですか？」
「キミもこつちよりの人間だと思ったんだが」
「どちらかと言えばそうですね」
「まあ、明日いろいろ話そうじゃないか」
「そうですね。新入生が入ってくれるなんて思っていなかったの、うれしいですし、男の子だしね」
「いや、俺はそつちじゃないので」
「結局そつちよりになってしまっうんですよ。そうなんですよね。私は期待して待っていますから、せめて卒業までには三島君ルートに入ってください」
「久しぶりに喋ったと思ったら、意味不明なことを言わないでください」
「まあ、二人はこんな感じなんだよ。いつも通りなんだよこれが、残念ながら」
「本当に残念ですね。まあ、分かってきましたけど」
「そうか。じゃあ、明日またここに放課後集合と言うことで。」
「わかりました。体験するだけですけどね」

「それでいいよ。気に入ったら正式に入部すればいい」
「待ってるよ。僕も」
「私も二人の関係とか、気になります」
「何の話をしているんですか？」
一名、明らかに話を聞いていなかった。
「じゃあ、また明日」
「ああ、また明日な。……それと、重要なことなんだが」
「なんですか？」
「いや、明日でいい」
「気になるんですけど？」
「悪かった。なんでもない許してくれ。てへぺろ」
「てつめええええ!!」
「えっ!?!」
「そのふざけた使い方は何だ!!むしろもつ、あんたは使うんじゃない!!」
「えっと。分かりました」
「はあ、はあ。」
「……………」
「えっと。使い方がその……………」
「いや、分かったよ」
「えっ。あ、ですよね」
「キミはやっぱりこっち側だ」
「つつ。さようなら!!」
「帰っちゃいましたね」
「意外でしたね」
「まあ、そうだな。しかし、共通の話題で盛り上げられそうだ」
「そうですね」
「これからは、使い方を間違えないようにしないとな」
「それだけじゃないと思うんですけど……………」
「とりあえず、今日は解散」

いづして一日目が終わった。長い日だった。

入部〜後編〜

最後の授業の終了の鐘がなり、この後のことを少し考えてみることにした。

昨日、仮ではあるがキタク部に入部した。今日もこの後に部室に行く予定だ。とりあえず、行ってから考えるか。そう思い部室の前にたどり着き、ノックをする。

「入ってます」

「微妙に間違った返答の気がするんですけど!?!」

「いや、二回ノックするのは、トイレだよ」

「そんなのあるんですか?」

「聞いたことありますね、そんなこと」

「三回ノックが正しいんだ」

「じゃあ、今度からはノックしないで入ります」

「なんで!?!せつかく教えてあげたのに!?!」

「それより部長は?」

「軽く流されちゃったよ」

「渚ちゃんはまだ来てないですよ」

「部長はいろいろ忙しい人だからね。ここ以外でも」

「そうなんですか?これ以外にもやることなんてあるんですか」

「一応聞くけれど、どういう意味?」

「こんな部で変なことをやっているんで暇なのかと」

「忙しいのが好きなんだよ、きつと」

そんな感じなのかな。まあ、どっちにしろこんなことやってるんだからあんまり友達とか居なそう。

「おまたせしたね。諸君」

部長が、扉を思いつきり開けて入ってきた。

「じゃあ、昨日の続きからはじめようか」

「昨日の続きって?」

「重要なことがあるといったる昨日」
「そういえば、そんなことを言っていた気がしますけど……」
「どうせ、どうでもいいことだと思っけど。」
「じつは、この部は人数が不足している!」
「な、なんだってー」
「君が入ってくれないと、まずいことになる」
「まずいことって何ですか?」
「君を無理やり入部させることになる」
「無理やりって、何をしようとしてるんですか」
「いや、ちよつと名前をここにね。書いてもらっただけだから」
「分かりやすい詐欺だ!」
「騙すのはやつぱりそつちが上か」
「いや、そのネタは一回だけで十分です」
「ところで二人はどうしたほうがいいと思っ?」
「普通に入部してくれると思っますけど。僕は」
「私もそう思っます。二人はもうすでに出来ていると思っます」
「何も聞いてないでしょう。あなたは!」
「うーん。じゃあ、入部して」
「ドストレートだ」
「どうせこつち側なんだから」
「いや、大きな壁があるはず」
「たぶんだけど、無いよなにも」
「……もうなにも言えねえ。」
「じゃあ決定で」
「ちよつ」
「早速君に頼みたいことがある!」
「なんですか?頼みたいことって、どうせ変なことなんでしょう」
「ど」
「いや、これは毎年やっっていることなんだよ」
「毎年?そういえばただここで話しているだけじゃないんですよね

「？」
「そう、今年もこの時期がやってきた」
「何をやるんですか？と言うか何をしたんですか？去年は」
「聞いて驚くなよ。なんと、生徒会の手伝いだ！！」
「な、なんだってー」
「大変な仕事だった」
「って、手伝って。もしかして、それだけですか？」
「僕が、覚えている限りではそれだけのはずだよ」
「それでこの部が存続できている理由が分からないんですけど」
「いろいろだよ」
「そればっかですね」
いろいろって、まあ、いろいろな変わり者が集まってはいるけれど。……そこに自分が入っているのか？他の人から見たら。
「さっそくだが、黒崎君は何か案が無いかい？」
「案って？何のですか」
「どうやって生徒会の評価を上げるかだよ」
「手伝ってそういうことですか」
「はいっ」
「はい。あかりさん」
「もちろん色仕掛けです！！」
「よし、三島君任せた」
「僕がですか？」
「他に誰がいる？」
「いや、その前に色仕掛けとか高校生がやるようなことじゃないでしょう」
「そうだよな。しかも同姓同士なんて」
「なっ！？」
「そこがいいんじゃないですか！！分かってないな」
「一番分かってないのはあなたです」
「和んでいるところ申し訳ないが」

「いや、全然和んでないですけど……」

「問題が解決する方法を思いついた」

「この会話中に思いつくことなんてくだらないことだと思えますけど、一応聞きます」

「もう一人新人部員を入れる!!」

「いや、普通に無理です」

「はい!! もう少しくらい考えても」

「そもそも、俺も部員じゃないですけどね」

「残念ながら、先ほど黒崎君は、キタク部の正式な部員になりました」

「えっ。どういう……」

「実は、勝手に提出しちゃった。てへぺろ」

「てめええええ!! しかも二重の意味で!!」

「まあ、これで最初の仕事は新人部員集めだね」

「名前だけ借りてくるでもいいんじゃないですか?」

「残念だけど。黒崎君に友達はいないから!!」

「勝手な設定を加えるな!!」

「ああ、少ないだけ?」

「ぐっ。まあ、高校入ったばかりだし、知り合いもあまりいないし

……」

「まあ、とりあえず。これはこれでおしまいで」

「終わってないですけど!」

「勝手に名前を書いてくれればいいから」

「部長と同じ方法ですか」

「それじゃあ、最初の任務。新人部員を明日までに入部させること。以上」

「明日までって、聞いてないですけど!」

「今聞いたでしょ?」

「もう何を言っても無駄だよ。こうなっちゃうと」

「分かりましたよ。俺にも友達がいることを思い知らせてやります

よ!！」

「あれ、なんかいろいろ変わってるような？」

「あれ？会長と三島君のカラミ作戦は??」

そういうわけで、なんだかんだで新入部員を探すことになった。

もちろん名前だけ借りてだが。簡単にいくと思っていたのに、まさかあんな面倒なことになるなんて。

これが俺のキタク部での、最初の仕事だった。

新入部員は彼女!?

早速、名前だけでも貸してくれそうなやつらをあたってみたが、見事に全滅だった。いや、これにはちゃんとした理由があつて、見事に全員部活に入つていた。よく考えてみればこの時期にまだ部活に入っていないやつなんていないはずだ。期限の明日までに一人も集められないなんてことだけは避けたい。あの人たちに何を言われるか分からないからな……。

ここまで来たら仕方ない、切り札を出すことにした。あいつなら入ってくれるだろう。昔から知ってるし、中学は違つたけど久しぶりに会つたときに、同じ学校を受験すると知つてからまた話すようになったからな。

「確かとなりのクラスのはず……」

一人でつぶやきながらそのクラスの中を見渡すとあいつがいた。いわゆる幼馴染と呼べるあいつが。

「よう。今ちよつと言いか?」

「うん? まあ、だいじょうぶだけど?」

「さつそくだけど、俺と同じ部に入らないか?」

「いきなりすぎる展開!?!」

「じゃあ、オツケーつてことで」

「どこら辺でそう感じちゃつた?」

「ここに名前書くだけでいいから」

「いや、だから詳しく聞かせてもらいたいんだけど」

「そういえば、あのゲームクリアしたんだけどさ……」

「うん? どのゲーム?」

「ほら、今アニメでやってるやつ」

「ばか。まさか、ネタばれする気が」

「いやー。よかつたぜ。とくにあのルートが……」

「あー。なにも聞いていませんよー」

耳をふさぎながらあーあー叫んでいる。どこからどう見ても残念な子だ。

「やめてほしかったらここに名前を」

「すでに脅迫だ!？」

こんなことを普通に出来てしまうくらいの仲の良さではある。たとえ相手が女子だったとしても。

「本当に、名前だけ貸してくればいいから」

「部活って、あの変な部活っていったやつでしょ……」

実は少し、説明済みだった。どちらかというと、部長あたりと気が合いそうな感じがするから、あまり紹介しなくなかったんだけれども。

「まあ、とりあえず見てみますか」

結局俺と同じく、体験入部という形からなら入ってくれそうだ。

部室にたどり着きいきなり、

「あなたが、黒崎君の唯一の友達？」

いきなりかなり失礼なことを言ってきた。

「はい。そうです」

「って。肯定してるんじゃない!!」

「唯一のってあってるじゃん。だから」

「あつてねーよ」

「でも、一人しか連れて来れなかったんじゃないと思うけど」

「しかも、女の子」

「そんな、黒崎君は三島君を捨ててしまうなんて。まさかの展開!？」

この人はもう放置。

「言っておきますけど、他はもう部活に入っていたただけのことですから」

「大丈夫だよ。わかってるから」

「私は分からないけれど」

「何ですか?」

「そもそも、君が女の子を連れてくるなんて予想外すぎたけど」
「いや、こいつとは幼馴染というか、そういう関係なので」
「いろいろ知ってる関係です」
「なんかめんどくさくなりそうだから、その発言はやめようか」
「間違えました」
「なんというか。すごいな」
「一言で言えば残念なんですよ。いろいろというか、すべて？」
「すべてって、そこまで言っちゃっつ」
「あ、たりなかつたか？」
「そういう意味じゃないよ。たりすぎてるよ。有り余っちゃってるよ」
「よし、分かった。入部許可」
「わーい」
「って、何で喜んでるんだ!？」
「そういえば、まだ名前って聞いてなかったよね？」
「そうでした。じゃあ、まず自己紹介から」
その瞬間、嫌な感じがした。あの時と同じようなことをするんじゃないかと思ったからだ。
「私の名前は、後藤薫。普通の人間には興味ありません。とりあえず宇宙人にまずは会ってみたいです。つぎに未来人を待っています。そして……」
「はい。以上です」
めちやくちななことになる前に止めたかったが、少し変なのが聞こえたかもしれない。
「ふっ。予想以上の上物じゃないか」
「なぜか高評価!？」
「まあ、面白そうではあるけれどね、彼女は」
「いや、全然面白くないですよ。ただ残念なだけです」
「でも、それだけだったら彼女のことを誘ったりしなかったんじゃないかな？」

「まあ、そうですね……」

「あれは面白かった。はやく次が読みたいと私に思わせるくらいに」

「アニメも良かったですけどやっぱり原作のほうが」

「やっぱり部長とは気が合ってしまうんですね」

「だからイヤだったんだ？」

「いや、べつにそんなんじゃないですから」

「どんなんだよと、思ったけど二人の話が終わったところを見計らって」

「じゃあ、ちゃんと昨日言ったとおり俺にもちゃんと居たと言つて」

「いやー、まさか彼女を連れてくるとは思わなかったけどね」

「彼女じゃねえよ。幼馴染っていったっじゃない」

「幼馴染の彼女なんですよ？」

「ちがいます！！」

「ところでここが何の部なのかは言ったのかな？」

「いや、それ俺が聞きたいくらいなんですけど」

「今、新入部員が少なくて部の存亡の危機だった。しかし、あなたが来てくれた事によってこの部は救われる。だからここに名前を」

「はい！！！」

「って、だからどんな詐欺……って簡単に騙されたやつが居た!？」

「これであなかもこのキタク部の一員です」

「まさかこんな軽音部状態になっているなんて思わなかったよ」

「ん？この学校に軽音部なんてあったか？」

「確か少し前に出来たと思うけど……」

「アニメと同時に」

「この学校もそういう波を受けたんですね……」

最近全国で軽音部が増えているらしい。アニメ止まりにしる、全国の高校生。

「じゃあ、ここも名前変えないといけませんよね。キタク部……みたいな」

「パクリじゃねえか」

「きつと、オマージユって言うからオツケーだよ」

「全然オツケーじゃない」

「あー劇場版が楽しみだな」

完全にこつちの話を見殺した。まあ、楽しみではあるけれども。

「明日からはこの5名で新生キタク部を始動させるー!」

「新生つて言っても、人数が増えただけじゃないですか?」

「いやいや、そこがね重要なんだよ」

「まあ、確かに5人にもなれば普通の部っぽくはなりますかね?」

「どうだろう?」

まあ、確かにここは人数が集まれば集まるほどに話の内容がディープになって行きそうな気がするから、これくらいがちょうどいいのかもしれない。

「それでは、今日はこれくらいにしておくか。それではまた明日。解散!」

「じゃあ、帰るとしますか。って、何か忘れてるような?」

「ああ、たぶん北野さんじゃないかな?」

「ああ、そういえば今回何か言いましたっけ?」

「なんか僕と黒崎君が分かれたとかそんな事を」

「じゃあ、いつも通りですね」

「まあ、そうだね」

いつもどおりに影が薄い。あかりなのに、いや、あかりだからこそなのか?

とりあえず今日、幼馴染である薫と一緒に部活に入ることになってしまった。日に日に変になっていく、主に俺の周りで。

「明日からは一緒にここに行こうね」

「分かったよ」

とりあえずそう答えておく。いつまでこのテンションのままで行けるのか?それくらいは見届けてやるうと思いなから……今日も終わった。

私の今後の立場についての話(前書き)

この話は、番外編的な内容になっています。主役はまさかのあの人はです。

私の今後の立場についての話

わたしは今、怒っています。この部でわたしは絶対に必要な存在だと思っていました。最近になって2人も新人部員が入ってきてわたしの影がだんだん薄くなってきたような、そんな気がするのです。だから今回は一言言っただろうと思ひまして、黒崎君を呼び出したわけなのです。昼休みに。

「それで、用件って何ですか？」

「昼なのにめっちゃくちや眠そうな目をしています。きっとさっきまで三島君との……」

「呼び出しておいて一人で妄想モードに入るのはやめてください」

「はっ。ごめんごめん」

「まあ、いつものことなんで大丈夫ですけど」

「今回呼び出したのは他でもないんだけど。わたしって影薄くなってきたくない？」

「今さらですか!？」

「驚かれたよ!!影の薄さにいまさら気づいたのかって。」

「薄いと言うか、存在感が無いと言うか……」

「あんまり変わらないような気がするけど」

「とりあえず、妄想を減らすこと」

「えっ。いきなり死刑宣告？」

「死ぬのか?あんたは妄想しないと!!」

「死ぬ!!」

「言い切りやがった……」

「たぶんじゃなくて、絶対死ぬ。妄想無しの世界なんて考えられない。ノー妄想、ノーライフ。」

「とりあえず、話の途中でニヤニヤするのはやめましょう」

「ニヤニヤなんて」

「今とかしてましたけど」

「思ったことが顔に出ちゃうタイプなのか」
「いまさら自分分析ですか。遅すぎるでしょう」
「人に遅すぎることなんて何一つ無いんだよ!!」
「ああ、確かに。そうですね、俺が先輩をまともに変えて見せますよ。手っ取り早く」
「なんだか最後の言葉には少し不安が残るけど。頼もしいです。」
「とりあえずその妄想をぶち壊しましょうか?」
「いきなりハードだよ!?!」
「これが出来ないとなにも出来ないと思うんですけど」
「妄想無しの人生なんて……」
「はい、はい。さつき聞きましたから」
「簡単に流されてしまいました。」
「まあ、あの中で生きていくにはかなり濃いキャラが必要ですよ」
「今より?」
「今なんてまさに、あっさりーん状態ですよ」
「なぜかわかりやすい!?!」
「すごく共感しながら観ています。」
「どうしたらその状態を抜け出せるかな?」
「う〜ん……」
「まずい本格的に、悩み始めた。昔もうちよつとライトな感じの相談を渚ちゃんにしたことがあります、あやふやなまま終わったのを今思い出してしまいました。」
「えつと、そんなに悩まなくても簡単なことでもいいからね?」
「いや、さっきのがだめな時点ではほとんどの方法が消えましたよ」
「そんなすごいことだったの」
「もう、いつそのことこのままの状態をさらに加速させるのはどうですか?」
「えつ。それってもしかして、さらに影が薄くなったりしないよね?」
「今より下なんて無いと信じています」

「今が一番下なんだ。底辺なんだ!？」
「それはそうですね。まあ、少なくともあの部では」
「そ、そうだよ。あの部ではだよ」
「まあ、あの部で底辺って言うのはかなりまずいと思いますけどね」
「たしかに。まずいよね」
「自分の部なのにひどいことを言っているような気がしますけど、こ
こは許してください。」
「実はもう結論は出ています」
「えっ。出てるの結論？」
「じゃあ、始めに言ってくればよかったのに。」
「それはですね……」
「それは？」
「今まで通りで行くことです」
「今まで通り？」
「そうですね」
「イヤそれがだめだから相談したんだけどね？」
「むしろ先輩の唯一のキャラ要素である影の薄さが無くなったら本
格的に出番無しですよ」
「それしかないの!？」
「だから今のままいい感じのところ、軽く一言一言、言ってくれ
ばいいですから。それでこそその先輩ですから。まあ、あと……」
「うん?あと何かな?」
「少しなきそうですね。がんばってこらえながら聞いてみます。も
しかしたらいいことかもしれないから。」
「はやく飯が食いたいので、こちら辺にしておこうかと思ひまして」
「うわ〜ん!!」
泣きました。さすがのわたしももう耐えられませんでした。号泣
です。しかもそれ横目で見ながら黒崎君は戻っていきました。
「結局……」

結局のところ、なにも変わらずに今まで通り。ということになっ

てしまいました。

ちなみに、これを機に黒崎君と三島君のカラムの妄想が激しさを増したことは言うまでもないことです。

勉強会！？

「今日は近づいてきたあの日についてのことです」

部長が高々と宣言した。が、

「あの日？」

「深夜アニメじゃないから」

「それくらいは分かりますけど」

と言うより日じゃないしな。

「新入生の二人は分からないんだよね」

「何かイベントでもあるんですか？」

「そう、この部ではあかりと薫、君たち二人が関係している」

「私もなんだ！？」

「この二人の共通点と言えば……」

影が薄いのは一人だし、ちょっと頭が残念なのは……

「あつ。残念な二人ですね」

「残念って、いきなりひどいな」

「正解だ。さすが黒崎君だ」

「渚ちゃん？正解なの？」

「残念な二人が関係している日って何ですか？」

「テストだよ」

「テストって、期末にはまだ早いと思いますけど……」

一応まだ4月だからな。

「数週間後に迫ってきたゴールデンウィークを過ぎたら、すぐにテストがあるのだ」

「テストって俺たちにも普通にあるってことですよね？」

「ああ、だから今回勉強会を行おうと思ったのだ。さすがに二人も赤点者を出すのは生徒会への点数アップ問題にかかわるからな」

「まあ、新入部員がいきなり赤点はさすがに……」

「じつとこっちを見ているけれど実は、今のところ分からないとこ

るなんてないからね」

「はい、はい」

「何、その気の無い返事は!？」

「ところでわたしも入ってるってどういうこと？」

「あかりは毎年、危険ラインから抜け出せていないからな今年は楽に行きたいからな」

「一応受験生だから勉強してるんだけど……」

「それよりも、俺は置いておいて二人はどうなんですか？」

「自分を置いておいて聞くんだ？」

「私はもちろん余裕だ」

「それは部長は余裕だと思いますよ。今年も」

「部長って勉強できるんですか？」

「知らなかった？部長はね、2年連続で学年トップなんだよ」

「トップって、しかも2年連続……」

「まあ、普通だよ。これくらい」

「さすがすぎる。部長のスペックがやばい。やばすぎる。何でこんな部をやってるんだ？やっぱり、頭のいい人は考えてることが良く分からないな。うん。まあ、あんまり、分かりたくもない気がするけど。」

「ちなみに、2番目が生徒会長なんだ」

「会長が2番目って!?!もしかしてそのことで目を付けられているんじゃない？」

「さすがにずっと2番目だとね」

「ずっとつてもしかして、2年間ですか？」

「ああ、一度も譲ったことはないな」

「絶対にそれが原因で目を付けられているんだと……」

「だから、適当に点数アップをしているんだ」

もしかしてそれすらも嫌味とかに思われているんじゃない。

「あいつのことはこれくらいでいいだろう？」

「ただ嫌いなだけなのか？」

「じゃあ、残念な二人のための勉強会を始める!!」

「残念って、さつきから言いすぎだよ!？」

「まあ、実際に残念だから仕方ないでしょう」

影が薄くて残念って、すごいな。でも、これで今回もメインなんだからなにもしなくても自然に話すことも多くなるだろうな

「じゃあ、まずは英語からだが」

「英語って、暗記科目じゃないんですか？」

「アルファベットから教えようと思ってな」

「まさかそんなに出来ないんですか!？先輩!？」

「何でわたし!？さすがにそれくらいは分かるよ」

「いや、まあそれくらいは分かりますよね。二人とも」

「いや、何それくらい分かっているだろうと思っていたがな、もちろん」

「当然だよな。渚ちゃん。同じクラスだもんね」

「同じクラスなのになんか微妙な関係な気がするんだけど」

「そこに踏み込んだらだめだよ。さすがに……ねっ、黒崎君」

「あっ。そうですよね。すみません」

「えっ、なにその反応心配しなくても大丈夫だよ!？」

「なにも言わなくてもいいですよ」

「ところでこれなんだが」

「おもいつきり無視してますけど!？」

「まさか本当だったなんて……面白半分で言っただけなのに」

「ほ、本当なの。もしかして、ねえ、渚ちゃん」

「うん?まあ、友達だと思うが?」

「良かったですね。先輩、友達一人居て」

「うん。本当に良かった、って一人じゃないよ」

「じゃあ、勉強開始だ」

「本当だよ!!本当にちゃんと居るからね」

結局その日だけということにはならず、しっかりと継続して勉強会をしている。もちろん二人の為だけに。

「ゴールデンウィークの予定だが」
「このまま勉強会ですか？」
「うーん。どうしようかと思ってな」
「もう、いいんじゃないかと」
「まだ、不安だと思うよ!？」
「自分で言っちゃうのかよ」
「ゴールデンウィークも勉強会で決定みたいですな」
「そうだな。それでは、前半は遊ぶから後半に集中して勉強するぞ!！」
「自分が遊びたいのか……」
「渚ちゃんも受験生のはずなのに」
「まあ、部長は大丈夫だと思っけどね」
「それでは、今日も適当に勉強開始だ!！」
「適当なのかよ!！」
その通りにゴールデンウィークまでは、適当に勉強して、休みに入った。
「まさか、後半って言うのが最後の一日だけとは、想像してませんでした」
「たまっていたアニメを見ていたら今日になっていた」
「まさか、寝てないんですか？」
「じゃあ、勉強会を始めるぞ!！」
「部長がやばい目をしている!？」
「とりあえず部長を少し休んでいてくださいな」
「そうか。それならさっそくあと少しでクリアのゲームを……」
「いや、だからもう寝てるよ!！」
そんな感じで結局ゴールデンウィークは終わった。
テストの結果はもちろん言うまでもなかった。

第一回キタク部会議

今日は何かの会議をやるらしい。なぜか靴箱に手紙が入っていた。少しドキツとしたのは内緒の話だが。

いつも通りの時間に部室に行くと、すでに自分以外の部員が集まっていた。

「今日は言つてある通りに、大切な会議がある!!」

「それで、どんな会議ですか？」

「その名も……」

「その名も？」

「つて言うか、引つ張るところなのか?ここ。」

「第一回キタク部会議だ!!」

「な、なんだつてー」

そのまますぎる。そのまますぎるネーミング、さすが部長。

「じゃあさっそく始めるぞ」

「急ですね」

「まずは、その残念な二人から。意見はあるか？」

「ぐっ」

残念な二人というのはもちろんあの二人だ。

「意見つてこう言う会議つて前もやってませんでしたか？」

「今回はしっかりとした部になったからな」

「じゃあ、今までは……」

「まあ、副会長だから少しぐらい強引なことできるんだよ」

「副会長？」

「会長なら知ってるけど……副会長つて誰だっけ？」

「私が副会長だよ」

「は？」

「部長が生徒会副会長」

「そんなことはどうでもいい。それよりも何かないのか？」

「どうでもいいことなんかじゃないですけど。まあ、自分で何かあるからこんな会議をしてるんですよ？」

「まあ、そうだな」

「じゃあ、どうぞ」

「ずばり、副部長を決めたいと思う」

「副会長ってこの部のですよね？」

「当たり前のことを聞くんだな」

「必要なですかね？このキタク部に」

「もちろん必要だ。三島君ならば副会長、つまり来年の部長でもいいと思ってるよ」

「そ、そこまで評価してもらってたんですか……」

副会長になるってことは、来年の部長になってしまう。地獄だな。いや、切り抜けられる方法がある。

「ここは最高学年である二人が部長、副部長でいいと思いますけど」「ぼ、僕も賛成ですね。来年の部長については残りのメンバーで決めますので」

「私は、まだ入ったばかりなので……」

「って、私に決定なんですかー？」

「よかったじゃないですか。目立ちまくりですよ」

「全然よくないよ。今までまったく目立たなかったのに、急に目立つ立場になると何したらいいのか分からないよ……！」

「安心しろ。もちろん私がすべて教えるぞ。一からな」

「じゃあ、決定と言うことで」「一回目の会議がこれほどにまでうまくいくとさすがに思わなかったぞ」

「まあ、当分二回目が来ないことを祈ってますよ」

「ふっ。どうだろうっかな？」

「えっ。本当にもう決定なの!？」

「これでこの部も安泰ですね」

「うん。そうだね」

「二人とも棒読みになっていますよ」

「そんな指摘できるのはやっぱり先輩しか居ません」

「実はツツコミの素質があっただんですね」

「違うツツコミなら想像するけど」

「と言っわけで、副部長に決定です」

「急に戻してきた!!」

「これで今日は終わりだな。よし、解散」

部長は、めちやくちや嫌な笑い方をして今日の会議の終わりを告げた。

「本当に決定しちゃったの？本当に？」

一人まだぐだぐだ言っている人が居たが、みんな無視して行った。

6月について

「さあ、ようやく副部長も決まったところで」

「本当にこのままいくだなんて……」

この前の会議で決まった副部長は現実を認めていないようだった。

「まだ何かあるんですか？」

「6月、それは戦いの月だ!!」

「戦い？6月には別にこれといった行事はないと思いますけど？」

「6月には、休みがない!!」

「……………」

「確かにそうですね。祝日が一日もありませんね。でも、戦いとい
うのは？」

「毎日が戦いだ」

どこの名台詞だ！？つつこまないけど。

「夏休みもあるからそれくらいは……………」

「夏休みもどうせ勉強だ」

「受験生なんだから当然でしょう」

「あかりは遊び続けるそうだとぞ」

「急に来たけどそんなこと言ったこともないよ!？」

「この人のこと別にいいでしょう。どうしても」

「どうしてもよくないよ!？」

「確かにどうでもいいかもしれないが、夏休みに急に毎日遊び続け
たらサボり癖がつくだろう!？」

「そ、それはそうかもしれないですけど」

「と、言うことでちよくちよく遊ぶ」

「夏休みの前に遊びの準備運動みたいな感じですか？」

「まあ、そんな感じだ。微妙なたとえではあるが」

そこは触れちゃいけないところだろ……。自分でも感じているだ
けに、きつい。

「じゃあ二回目を始めるか」
「二回目って何のですか？」
「キタク部会議第二回だ！！」
「はやっ。もう二回目！？」
「議題はもちろん。どう遊ぶかだ！？」
「実にくだらない議題のもと会議が始まった。」
「でも6月は梅雨ですからあんまり遊べるものってないような気がしますけど」
「ここで遊べるものにするか」
「部室で、ですか。じゃあ、僕は読書を」
「なんか普通ですね」
「この部だからあえて普通のをね」
「普段から何か読んでるんですか？」
「うーん。やつぱり、ライトノベルがほとんどかな」
「部長は好きそうですね。マンガとかラノベとか」
「ああ、むしろラノベしか読まない。普通の小説なんて読んだことがない！！」
「何でそこで力を入れる！？」
「私も小説ってあんまり読みません」
「じゃあダメめがねなんですな、それ」
「ひどい。というか、なんか急に冷たい」
「じゃあ、読書で決定だな」
「それでいいんですか？部長」
「ああ、読書だ。一人づつ音読をしてもらうかな」
「きたー。三島君と黒崎君のアレなやつ音読……」
「なんかすごい怖いこと言ってる。」
「音読ってなんか授業みたいだ……」
「かなりくさいセリフを全力で言ってもらおう」
「いや、それ部長もやるんですよね？」
「ああ、当然だ」

「黒崎君、部長は一応声優志望だからね？」
「そういえばそうだった。なにもしてないと思っていたらまさか、こんな練習をしていたなんて。」
「まあ、今回が初めてだがな」
「予想通りでした!!」
「さっそく幻想を殺してしまったな」
「いや、全然面白くないですから」
「ところであかりは何を読んだ？」
「いや、ここで副部長に振らなくてもいいですから」
「もちろん……」
「はい。どうもありがとうございます」
「急に扱いがひどくなってきた!?」
「と言っより会議なんて意味が無いと思うんですけど」
「なぜだ？」
「どうせなにも変わらずにどうでもいい子と話して終わりだと思っ
ので」
「まあ、僕もそうなるとは思っけどね」
「そこは言っちゃダメなところなんだよ」
「副部長は黙っていてください」
「あっっ」
「そうなるかもしれないが、なにも考えないよりもましだろう」
「なにも考えてないじゃないですか。常に」
「いや、さすがにそれは言い過ぎなんじゃ……」
「とりあえず、黒崎君は居残りだな」
「な、居残りって!?!」
「もちろん説教だ」
「あ、今日は少し用事が……」
「そうか、それなら明日2時間コースだな」
「今日で大丈夫です」
「それじゃあ、僕たちは帰るから」

「逃げるんですか？」

「いや、居残りは黒崎君だけだから……」

「そうです。副部長は帰ってもいいんです」

「そうですね。副部長はいいですよ。さようなら」

「だから扱いが!!」

「まあ、僕も帰るね」

「ぐっ、本当に帰ってしまった」

「さあ、それじゃあ今日は、3時間コースにしておこうか？」

「だ、騙されたー」

結局、その説教は見回りに来た先生が来るまでやっていった。それは、ちょうど3時間だった。

男二人の……

そう言えばこの部に入ってから不思議だと思っていたことがある。それは、三島先輩のことだ。あの二人はまあ、同じ学年だし、副部長のほうは友達だと思ってるらしいけれど、三島先輩との共通点がよく分からない。どうしてこんな部について、自分もその部の一員になってしまったんだが。

「何か考え事？」

「あ、先輩」

ちょうど、三島先輩に会ったので聞いてみよう。邪魔なものも居ないし。

「少し考えていたんですけど……」

「なんだい？」

「どうして、この部に入ろうと思ったんですか？」

「ああ、僕が何でこのキタク部に入ろうと思ったかかってこと？」

「はい。少し気になってしまいました」

「うん。大丈夫だよ。まあ、たいした理由なんて無いんだけどね」

「やっぱり部長に拉致されたとか、そんな感じなんですか？」

「いや、そんな犯罪じみたことは無かったけど……」

少し安心。実は、ありえると思っていた。

「逃げ込んだところがたまたまキタク部だったんだ」

「逃げ込んだ？」

「そう」

「何から逃げていたんですか？」

「女の子たちから」

「……えつと？」

「なんか、入学当初すごい人気があったみたいで、それで」

そういえば、かなりのイケメンなんだよな。今はもうただの変態じみた人にしか見え無いけど。

「うらやましい悩みですね」
「そうでもないと思うけどね」
「キヤーキヤー言われて、追いかけてまわされて、アイドルみたいじゃないですか」
「まあ、そのときは2次元のほうに興味があったから大丈夫だったよ」
「なんかさらっと、すごいこといった気がするんですけど」
「今になってはもう全部オツケーだよ」
「なにも聞いていません」
「いや、むしろなにも聞きたくない。っていうか、やっぱり変態だった。」
「うん。じゃあ、話を戻すけど逃げ込んだ先がキタク部だったんだ」
「それは聞きました」
「そこに部長が居ればもう……分かるよね？」
「結局、俺と大して変わらない感じですか……」
「いろいろ相談に乗るよ？一応先輩だから」
「もう、人生最大クラスの失敗をやらかしたんで大丈夫です」
「そう、じゃあ、安心だ」
「俺が来る前はどんな感じだったんですか？」
「いや、今とほとんど変わらないよ」
「変わるでしょう。ツッコミが居ないんですから」
「まあ、そこは二人で部長にツッコミを入れてたけどね」
「ずいぶんと不安な」
「正直ね」
「夏休みとかはどうしてたんですか？」
「それは、内緒で」
「な、なんですか？」
「楽しみは取っておかないとね？」
「いや、全然楽しみじゃないんですけど。むしろ、怖くて聞いたんですけど……」

「まあ、すぐに分かるんじゃないかな？楽しみに待ってるといいよ」
「だから、楽しみじゃないんですよ！！」
「じゃあ、1つヒントを」
「ヒントですか？」
「そう、1つだけね」
「なんですか？」
「夏休みの宿題は、すぐに終わらせたほうがいいよ」
「宿題？」
「そう。部長はそういう性格だからね」
「最初に終わらせてあとは全部遊ぶってことですか？」
「うん。部長はね」
「まあ、でも今年受験生だからそんなことは無いと思いますけど」
「だいたいね」
「本当にそうだといいですけどね」
「まあ、去年は最初の一日と最後の一日以外遊び続けていたからね」
「……冗談ではなく？」
「もちろん」
「普通にありえるからな、あの部長さんなら。むしろよく二日も休みがあつたなつてレベル。」
「今年は休みが増えるといいね」
「そうなることを願ってますよ」
「うん。それじゃあまた放課後に」
「はい」
「とりあえず、どちらにしる早めに宿題は終わらせておいたほうがいいな。今回はかなり重要なことを聞いた。副部长とは違って、本当の無駄話にはならない。」
「まあ、とりあえず今出来るのは……。」
「部長が勉強してくれませうように」
「そう祈ることだけだった。」

しりとり!?

「さあついに6月だ!!」

「なぜかテンション高いですね?」

いつもの何割が増して部長のテンションが上がっている気がする。

「それよりさっそくしりとりをしようじゃないか」

「急にしりとりですか?!」

「まずは、私からしりどりの、『り』」

「りん」

「いろいろ言いながらもやっっちゃうんだよね。黒崎君は」

「うるさいですよ。先輩。次ですよ」

「いや、これは2人だけの真剣勝負だ!!」

「ただのしりとりなの?!」

「ゴマ豆腐。さあ、『ふ』だ」

「そういうのもアリですか?二日酔い」

「まだ未成年だろう?」

「いやただのしりとりですよね?」

「いか」

「急に普通になりましたね」

「さあ、もう降参してもいいんだぞ」

「さすがにはやいと思いますけど、それに『か』なんて難しくも無いですし」

「4、3」

「カウントダウンが始まっている?!」

「2」

「カラス」

「ギリギリだぞ。まったくそんなに難しかったか、まあ仕方の無いことだな私は昔からしりとりでは負けたことが一度も無いからな」

「制限時間があるなんて聞いてなかったんですけど」

「うん？そうだったか？しかし、スリルが少しは合ったほうが楽しめるだろう？」

制限時間以内に言えなかったらどんなことされていたのか、とりあえず簡単なのでよかった。

「ところで、6月も意外といいことが分かった」

「あれ！しりとりは？」

「そのいいこととは何ですか部長？」

「ああ、三島君。今何のアニメを見ている？」

「完全に無視されている。もしかして負けたことが無いんじゃないかと最後までやりきったことが無いだけなんじゃ」

「アニメですか？まあそれなりには見えていますけど」

少し見ていないだけで、ここでの話しについていけない時があるからな。主に一人の人が暴走して話し始めるから。

「6月はちょうど終わりの時期だろう」

「ああ、今やってるアニメが終わるんですね？でもそれだったらいいことにはならないんじゃない？」

「甘いな、黒崎君。実に甘いな、まるでそう。あれのように！」

「あれというのは……？」

「7月からの新アニメがもうすぐだと思つと寝ていられないんだよ」

「また、無視された……」

「でも、部長。3ヶ月ごとに新しくなったりするんじゃない？」

「ああ、もちろん毎回テンションが上がっているぞ。それよりも今年は秋が楽しみだ」

「7月はどうなったんですか！？」

「まあ実は毎回楽しみなのは変わらないのだが」

「ただアニメが好きだけってことじゃないですか」

「一言で言えばそう言うことになる」

結局ものすごく簡単な形に収まったな。

「アニメ以外では何か楽しみなもの無いんですか？部長」

「以外と言われると、そうだな。特に無いな」

「答え出るの早すぎでしょう……」

「そういえば体育祭が夏休み明けにありますよね」

「そんな先のことを言って何になるんだ三島君？」

「そうですね」

「体育祭って何か他の学校とは違うことでもするんですか？」

「いや、他とそれほど変わらないと思う」

「まあ、こちら辺では夏休み明けでやるのがうちの学校くらいだからあえて挙げるとすれば、それくらいじゃないかな？」

「今はもう休みを待ってその後のことは考えない」

「部長は嫌いなんですか？」

「別に嫌いと言っわけではないが、面倒なだけだ」

「それでも、3年なんですから」

「ん？そうだが、何かあるのか？」

「いや、最後なんですよ？高校生活最後の体育祭なんですよ？」

「そういうのは受け付けていないので、よくわからないな」

「俺の中学では最後だからって、女子がすごい熱くなっていたんですけど……」

「いいことなんじゃないかな？まあ、僕もあまり興味ないけれどね」

「まあ、体育祭で燃えるよな人だったらこんな部に入ってないよな。それはそうだ。聞いたほうが馬鹿でした。」

「そのあとに文化祭もあるんだよ」

「文化祭？そっちにはやる気があるんですか？」

「もちろんだよ。黒崎君」

「部長。なんか怖いんですけど……」

「なんか後ろに、ゴゴゴゴって文字が見えそうな迫力を出している。もちろん見えないけれど。」

「やっと部として認めてもらえたんだ、今年は暴れさせてもらっぞ」

「まあ、ほどほどにお願いしますね」

「ああ、そうだな。今から熱くなってもしょうがないからな。安心したまえ三島君」

安心できないんですけど。だって、全然はなし聞いてないじゃん。「ふう、やっと作業終了しました。と言うわけで、私もしりとり参戦いたします!!」

「あかり、今まで何をしていたんだ?」

「ちよっとした読書を」

「薄めの本が何冊かおいてあるんですけど。これですか?」

「そう、それだよ。黒崎君」

「こんなところでこの人は何をしているんだ。まったく。」

「そうか。分かった。それじゃあ、あかりからだ」

「最初はもちろん、しりとり『り』です」

「リムジン」

「ん。ん?えつと、渚ちゃん?」

「ああ、私の負けだ。さすがあかりだ。じゃあ今日は終わりにするか。それではまた明日」

「え?渚ちゃん?すごい棒読みだったよ。声優目指すんだったらもつとちゃんとしないと」

「突っ込むところそこかよ。」

「えつと、それじゃあまた明日」

「さようなら」

「え?み、皆さん帰っちゃうんですか?でも、『ん』でもまだ続けられるんですよ!」

「ああ言ってますけど、どうします?」

「部長が終わりって言ったんだから、今日はもう終わりと云うことで」

「まあ、そうですね。それが一番いいですよ」

「そう、『ん』が最初に来る言葉があるんですよ。知らなかったでしょうね。だから教えてあげます。それは、『ンジャメナ』です!」

「と言う、今までいたんだというくらい影の薄い人の叫び声が後ろから聞こえていた。」

夏休み目前

ついに夏休みを目前に迎えた今日。いつも通りに部活に集まっていた。そのとき、

「夏休みの予定が決定したぞ!!」

「よかったですね。旅行でもするんですか?でも、受験生なんですから少しくらいは……」

「君は何を言っているんだ?キタク部の休みの予定だぞ」

「は?」

「去年よりは軽くしてるんですか?部長」

「いや、去年と同じくらいだな」

「去年つてもしかして前に言ってた、ほとんど休みが無かったって言う……」

「そうだよ。それと同じ位だって言うんだったら休みは無いんじゃないかな」

高校最初の夏休みが部活尽くめか。文字だけ見たらなかなか青春してるんだけどな。

「まず、最初の一週間でこの町を制覇する」

「いきなり意味不明すぎる!?!」

「そして次だが……」

「その前に制覇って何なんですか?!」

「質問は一切受け付けない!!」

「横暴すぎる!!」

「次の週は、これからここで決めようと思っ」

「ここで決めるってどういうことですか?」

「そのままの意味なんだが?」

「いや、だって夏休みの予定は部長が勝手に決めたんじゃ?」

「その週だけはみんなにも意見を貰おうということを決めたんだ」

「それじゃあ、休みで」

「もちろん却下だ」

「ちよつと待つてください。そうなるらと宿題はいつやればいいんですか？」

「貰った瞬間で終わらせろ」

「そんなこと絶対に無理だ！！」

でもこの人の場合は本当にやってそつだ。

「とりあえず最初の制覇つて言うのは何をされるんですか？」

「まあしかたないな、そこから話すか」

「いきなり変なことはしないんですよね？」

「この町の遊べる場所すべてに行つて、遊びつくすこと。それが、制覇と言つことだ！！」

「よかつた。割とまともで……」

「いや、黒崎君全然まともじゃないと思つけれど」

「つて、そつですよ。部長！！最初の一週間で制覇つて無理でしょうどう考えても！！」

「不可能を可能にするそれが私たちだ。そつ教えたはずだが？」

「アレをやると言つんですか？」

「ああ、そつだ。そのための今までの活動だからな」

「くくく、ついにこれで……」

「さあ、存分に奮いたまえ諸君」

「もついいですか？部長？」

「ああ、少しの余興としてはある程度楽しめたよ」

「そつですか。それにしても意味不明の妄想が……」

「ノリノリだつたじゃないか。黒崎君」

「部長には負けませすけどね」

「当然だ」

「一応声優を目指しているんですからこれくらいは軽いですよね？」

「ん？ああ、そつ言えばそんなことも言つたか」

「いや、それつてどう言つことですか？まさか、嘘だつたんですか？」

まあ確かにやってることが普通の声優好きのやってることと同じだからな。

「イヤそれは本当だ」

「そうだよ、黒崎君。昔から渚ちゃんは言っていたんだから本当だよ」

「まあそんな嘘ついても仕方ないですからね」

「さあ、話を戻して予定を決めようか」

「と、言うかもうその次の週やることをその週で話すことになりそうですねこのままだと」

「それはいいかもしれないな。じゃあ、それでいこうか」

「え？決定ですか？もしかして」

「いや、いい意見をありがとう。さすが黒崎君だ」

「そんなほめられ方全然うれしくないんですけど」

「じゃあ、その方向で行くんですね？部長」

「ああ、そうだな。決定だ。遊んでいればいい案も思いつくだろうな」

そういうことで、夏休みも変わらずに活動することが決まった。

内容はいつもと同じになりそうだけど。

前日

ついに夏休みを明日に控えた今日。もちろん今日も部室に行く。

と言うより呼び出されている。全員集合と言われている。だから今日は久しぶりに二人で部室に行こうということになった。

「そういえば、久しぶりに話した気がするんだけど」

「うん？そうだったけ？たまに会ってたと思うけど？」

「まあ、そうだけど。部室では全然だから」

「うーん。行ける時には行ってるんだけど」

「ん？そうだったけ？」

「うん。そうだよ。夏休みの話もしたじゃん」

「そうだった様な気がするような、しないような」

「いや、普通に居る時はいるから」

「じゃあ、そのときの話が今までは無かったのか」

「ん？どういうこと？」

「いやこっちの話」

「ふーん？」

「ところで、宿題終わったか？」

「宿題って、夏休みの？」

「ああ、そうだよ」

他の宿題なんて無いだろ。明日から夏休みなんだから。

「もちろん終わってないけど？」

「じゃあ、いつやる気なんだ？残念だけど、宿題の時間なんて部長は取ってくれないぞ？」

「最初の一週間は遊んでその次は部室なんですよ？」

「部室かどうかは分からないけど、いつも通り、話して終わりそうだな」

「その一週間で宿題は終わらせようと思うんだけど」

「うーん。やらせてもらえるかが問題だな」

「大丈夫だと思っけどな。だつてみんな色々なことしながら話してるもん」

「そう言えばそうだな。三島先輩なんていつも本読みながらだからな」

「うん。あかりさんだつて本読んでるよ」

「いや、あの人は……まあいいか」

「二人でこんなところでどうした？」

「あ。部長」

「今から部室に行こうとしていたんですよ」

「そうか。それではさっそく行こうか」

「もう、すぐそこですけどね」

久しぶりに二人で部室に行くはずだったのに三人になっている。

部長と歩くのは初めてのようなような気がする。いや、一回くらいあつたかもしれないけれど。相変わらず二人は仲がいいみたいだ。

「ああ、もちろん観ている」

「ですよ。今期一、いや、今年一番ですよ」

「まだ出揃っていないが、上位であることは間違いなさそうだ」

「それなのに、このバカやるうはネタばらししたがるんですよ」

「まあ、原作はゲームだからな。忠実に再現してあるらしいじゃないか」

「まさかの何であの一話になったかのネタばらしですよ」

「もう部室ですよ。お二人さん」

「そうだな。全員集合で夏休みのことを話すからな」

「分かってますよ」

「そうやって先に部室に入っていた。」

「ネタばらしは禁止だからね」

「実は……」

「禁止だつてのー!!」

「そうやって先に部室に行った。」

全員そろつた部室でいつも通り部長の第一声から始まった。

「ついに、明日から夏休みだが。もう、すでにキタク部の夏の活動が始まっている!!」

「ただ遊ぶだけじゃないんですか!?!」

「もちろん部活動だ」

「まあ実際いつもと変わらないと思うけどね」

「確かにいつも遊んでいるようなものですからね」

「いや今回はちゃんとした活動を行う」

「ちゃんとして、いつもは適当だったのか。まあ、そうだろうけど、っていうか気づいていたのか。」

「あの生徒会長をぎゃふんと言わせるために!!」

生徒会長に何か言われたらしい。夏休み中に活動しても生徒会長は分からないんじゃないか。

「ということでは明日は会長も来ってもらうことになった」

「は?生徒会長も来るんですか?」

「ああ。いつもちゃんとした活動をしていることを見せ付けてやる。無理だろ。どう考えても。」

ということでは。夏休み初日は、生徒会長というおまけ付きで始まることになった。もう何が起ころのか分からない。そんな明日がやってくる。

夏休み！！初日

夏休み初日。いつもと変わらない学校への道を歩いていた。今日の集合場所は学校の校門だった。

「相変わらず君は……」

聞き覚えの無い声が聞こえてきたがおそらくあの人だろう。

「いつも言っているがこの部は必要ないだろう」

「それを決めるのは今日一日の活動を見てからにしてもらおうか」

生徒会長。今まで見たことが無かったが、たぶん毎月の集

で見ている。メガネ以外にはこれといった特徴はなさそうだ。

「ん？ああ、やっと来たか。これで全員そろったぞ」

「ふん。そうか。それでは一応自己紹介でもしておくか。私が生徒

会長、阿部 光だ」

「それで今日の予定だが……」

「おい、聞け」

「お前の名前なんてどうでもいいことだ」

「まあ生徒会長であるこの私を知らないはずが無いだろうがな」

「いやしません、まったく知りませんでした。」

「それで今日はどんな活動を見せてくれるんだ？」

「この町の制覇の一つ目は……」

「ちよつとまで」

「なんだ？うるさいぞ」

「制覇とはどういう意味だ？」

「知らないなら辞書でも引いてみればいいだろ」

「そういう意味ではない」

「なんかいつもこんな感じで言い合ってるのだと思うと、会長の気

持ちも分かってくるな」

「クラス名物になりつつある光景ですからね。これは」

「こんなものを名物にしてるなんて、やっぱり変な人には変な人が

寄って来るんですね」

「それに自分が入ってることも忘れないようにね」

「そうそう、一番変なんだからね」

「いや、残念なことに一番はおまえだから」

「えっ。全然残念じゃないよ!!」

「今日は……」

いつの間にか二人の名物の光景は終了していたようだ。

「プールに行こうと思う!!」

「な、なんだってー」

「なに、そのようなことは聞いていないぞ」

「もちろん言っていないからな」

「しかし、水着が必要になるだろう」

「ああ、全員用意しているはずだが？」

「いや言っていないのなら用意など」

「はい、もちろん持ってきています」

「そうか、それでは早速行くとするか」

「ちょっと待て」

「何なんださつきから」

「なぜ、あの子は用意しているんだ？」

「当たり前だろ。プールに行くんだから、それとも裸で泳げと？」

「そういうことを言っているんじゃない。そもそも今日プールに行くことを伝えていなかったのではないか」

「ああそうだ。お前にだけな」

「どういう意味だ」

「そのままの意味だ。他の部員にはもちろん伝えてあった」

「まあ水着持参ということだけだったけど。どこに行くかまでは言
つてなかったな。」

「なぜ私には伝えなかった？」

「いや、なに本当に来るとは思わなかったただけだ」

「来いと言ったのはそっちだろう」

「まさかそれで本当に夏休みの初日から生徒会長が来るなんて思わなくてな」

「なんかいつにも増して部長がすごいんですけど」

「いやー、今日は会長のほうが妙に粘ってるね。やっぱりあのときの事があるからかな？」

「何かあったんですか？」

「うん。まあでもいつも通りのことなんだけどね」

つまりいつもの様に言い争っているだけだと言っことなのか。面倒だな。

「それではさっそく出発するか」

いつの間にか勝利したらしい部長が笑顔で言った。そして、生徒会長は少し肩を落としながらも部長を鋭い目つきで見つめていた。

プール！！

ようやく今日の目的地であるこの町唯一のプールに着いた。そして、今は女子たちの着替え待ちである。

「そわそわしてるね。黒崎君」

「べつに、してませんよ」

「楽しみが漏れ出してるのかと思ったよ」

「まったく……この部の人間は」

「待たされるのが好きじゃないだけです」

とりあえずここでは、そう言うしておく。ちなみに生徒会長はこのプールの売店で売っている水着を買っていた。本当にどうでもいいことだが。

「待たせたな」

「いえ、全然待っていませんよ」

冷静に三島先輩は言ったが、それは『アレ』だからだろう。

「それでは早速、行くとするか」

本当はここで、水着の描写を長々と語っていききたいところではあるのだが、自重しておく。

「まあ、子どもが一人混じっているけど」

「え？口に出てるけど!？」

「ああ、悪い別にお前のことじゃないんだけどな」

「先輩!!こいつがいじめてきます」

「ん？黒崎君がどうしたって？」

「何でもありませんでした」

「余裕で負けているな。二人に」

「もうなにも言わないで……」

そう言っただけはとぼとぼとした足取りで部長のところへ歩いていった。

「いや黒崎君？なかなかだね」

「ちよつ。こんなところで何言ってるんですか」
「そういう意味じゃなくて。なかなか酷いこと言ったなと思ってね」
「いや実際一人だけ子どもじゃないですか」
「ところで泳ぎに行かないの？」
「スルーですか！？まあ、行きますけど」
「二人とも何をしている。早く来い」
「部長も呼んでいるし、とっとと行きますか」
「まったく、やはりここの部員は行動が遅いようだな」
「とか言って泳ぐ気満々じゃないですか。もう、めがねも取って」
「はっ。そうか今なら何をしても見えていないのか！？」
「残念だったな。こんなこともあるうかと、コンタクトを用意していたのだ。この私はぬかりが無い」
「あつそ。じゃあ泳ぐか」
「おい。もつと反応してもいいんじゃないか」
まあ確かにこの人めんどくさいな。部長が妙に絡みたくなるのも分かる気がするな。
「今日は、全力で遊べ！！」
「イエス、マイロード！！」
「まったく、あいつは……」
「なんだか本当に子どもみたいだね」
「普通に子どもですよ。あいつは」
「っていうか。部長と生徒会長がまた言い争いをしているんですけど」
「まあこれはこれでいいんじゃないかな」
「明日も来るとか言い出しませんか？会長」
「今日あれだけ言い合えば十分なんじゃないかな」
「ああ、まあ、確かに。そうかもしれませんね」
「あれ、二人は泳ぎに行かないの？」
「はい、それよりも北野先輩は行かないんですか？」
「私は泳げないので行きません」

「分かりやすい理由ですね」

「そこにちょうど二人のカラミが見えたから来てみたんだけどもしかして、お邪魔だったかな？」

「先輩。泳ぎに行きましようか」

「うん。そうだね。競争でもしてみるかいい？」

「えっ。何かいってほしかったんだけどここは」

その後は、結局全員が夕方まで遊び倒していた。その中でも一番が生徒会長のはしゃぎっぷりがすごかった。

「それでは、私はここで失礼させてもらおうとするよ」

一番最初に生徒会長が何も言わずに帰っていった。

「案外あっさり帰っていきましたね」

「暇だったただけだろう。あいつは」

「生徒会長で高校三年の受験生なのに」

「あいつのことはどうだっていい。それより明日だが……」

明日の予定を聞いて、今日は解散となった。どうやら明日も忙しくなりそうだと考えながら、家路に着いた。

いつもと違う日

いつも通りに部室に集合。その連絡が来たのは、前の日の夜になってからだ。しかも、教えた覚えが無いのにメールで。

そして、部室に来たのにそこにはまだ部長は来ていなかった。

「部長はめずらしく遅刻ですかね？」

「そうみたいだね」

部長以外には遅れてくるものはいなく、5人が揃っていた。

「まあ、外で待つよりはマシですけど」

「部長が遅れるなんて、……まさか、深夜アニメの見すぎで起きれなくなっているんじゃないか」

「お前じゃないんだからそれはない」

「否定がはやいよ」

本当に今日はめずらしく部長が一番最後になるようだった。

「夏休みが始まった感じがまったくしないんですけど始まっているんですね」

「確かに始まっているよ。後藤さんの真似じゃないけど、夏休みの再放送アニメが始まったからね」

「それで夏だと感じるのもおかしい話ですけど」

「何を言っちゃっているんだい。アニメは日本が世界に誇る文化じゃないか」

「おまえはだまってる」

「本当のことを言っただけなのに!!」

「確かに本当のことだが、お前が言う途端に安くなる」

「本当に高いんだよね。しかも最近はDVDじゃなく、ブルーレイが普通になってきたんだよ。1000円増しだよ。これはでかいよ」

「値段のことを言ったんじゃないんだけど、まあいいか。面倒だから」

「いや、完全に聞こえるように言ったね」

「そして私は聞こえていないふりをする、大人だから」
「そして俺はお前がいなかったことにする。人間だから」
「えっ、どういうこと!?!」
「ところで先輩」
「スルーされた」
「あのプールの後、生徒会長とはどうなったんですか?」
「まあ会長はもう来ないと思うけど、一回くらいは来るかもね」
「すぐにもう一回プールに行くんだと思ってたんですけどもう行かないんですかね?」
「どうだろうね。さすがに一回だけなんてことは無いと思うけど。まあ、参考までにだけど、去年は三回行ったね」
「さすがと言うべきなのか、意外と少ないなと言うべきなのか」
「まあそのときは会長は付いてこなかったけどね」
「去年は静かで優雅でした。まるで私のように」
「いや、だれだっけ?」
「え?」
「いやもうそこまで出てるんだけど、確かにいた気がするんだよな。なんか影の薄いのが」
「そこまで分かってるんだっいたらもう答えだよ」
「でも、めんどくさいからいいか」
「ええ、そこはがんばって思い出そうよ」
「うわ、誰がいる!?!」
「もしかして、エンドレス!? 流行だからって無理やりすぎる」
「いやいや、ちゃんと覚えていますよ。えっと、北野あかり先輩?」
「いろいろと不安になってきたよ。疑問系って」
「ところで、三島先輩」
「華麗にスルーされた!?!」
「あかり先輩。私と一緒にですね」
「なにかこの二人ではダメな気がする。さらにダメになっていく気がする」

「部長遅いですね」

実際にはここまでではかなりの時間が過ぎていたが、部長が来る様子は無かった。

「そうだね。メールも電話もないし、と言ってもこっちからしづらいし」

「まあそのうち来るでしょう。部長ですから」

「全然分らないけどその理由」

「ふっ。それではこのあかり先輩が渚ちゃんにメールをしてあげましょう」

「そんな仰々しく言われても……」

ただメールをするだけなのに、やっぱり面倒くさいな。

「さっそくメールです。……あつ。変換が」

「どんな変換をしたのかあまり聞きたくないんですけど」

「よっし。送信」

「それで、なんて返ってきましたか？」

「そんなに早く返ってこないよ!？」

「まさか、部長にも出来ないことが」

「普通無理だよ」

「でも部長ならありえるかもしれないところがなんともいえないね」

「それどころか、返信が来るかも分からないくらいだよ」

「ああ、そういえば関係者でもなんでもない人でしたもんね」

「ええー。完全に関係者だよ、部員だしクラスメイトだよ」

「そう思っているのはあなただけです」

「ま、まさかそんなことが。って、騙されないけど!！」

「じゃあ、今日はもう適当にしますか？」

「そうだね。宿題をやるチャンスかもしれないね」

「しまった。宿題もってきてない」

「私は常に持っている、と言うわけで、教えて？」

「がんばれー。心にも無いけど応援してるぞ」

「全然応援してないよね!！」

「じゃあ、先輩である私が教えちゃおうかな」

「えっ、なんか不安です」

「どうということ!？」

それからいつものようにどうでもいいことを言っていた。もちろん宿題が進むことは無かったが、それ以上に気になるのは、今日結局、部長は部室にすがたを見せることは無かった。そして、メールへの返信も無かった。

変わらない日常

今日も部室に集合と言うメールが来たので、部室に来たところ……

「遅かったな」

いつも通りに部長が立っていた。

「それより部長、昨日はどうしたんですか？」

「少し別の用件で来ることができなくなったんだ。悪かったな」

「別にいいですけど。連絡の一つくらいは……」

「少し忙しかったんだ、実は今日はそれを途中で抜け出してきた」

「家の事情だったらそっち優先でいいんじゃないですか？」

「いや、実際問題私がないとこの部はダメだろう？」

「別にそんなことは無いと思いますけど……」

「本当にそうですよ。部長無しではダメだと言うことが昨日で判明しました!！」

「こいつは昨日、部長は深夜アニメの観すぎで来ないんだと言っていました」

「ほう、なるほど」

「うらぎられた」

別に仲間だった覚えはないんだが、どちらかと言うと部長のほうが味方だろそっちの。

「それはそうとして、全員揃った今、今後の予定を完璧にしまおうと思う」

「今日で夏休みの予定全部を決めるってことですか？」

「そうだ」

「またすぐにプールに行くんだと思ってましたけど行かないんですか？」

「そうだな。どうするか、行きたいのなら行くが？」

「別にそこまで行きたいわけでもないんですけど、去年のことを聞いていたら……」

「去年は去年、今年は今年だ」

「じゃあ、普通に制覇するだけですか」

「いや、少し遠出することを考えている」

「遠出？」

「ああ、すぐではないが考えている」

「遠出つてことはここからは結構かかるんですか？」

「そうだな。それなりにはな、しかし暇にはなったりはしないはずだ」

「じゃあそれは何時になるんですか？」

「まだ決まっていない」

「じゃあ今日全部決められないじゃないですか」

「途中まで決める」

急に勢いがなくなってきた。

「それならもう決めることなんてほとんど無いですね。制覇したあと何をするかくらいで」

「そうだな。まずはそこから決めるか」

「いつも通りでいいんじゃない」

「いつも通りにアニメについて語るんだね。わかるよ」

「全然分かん。今までそれほど語ってきてもないしな」

「じゃあこれから語っていきこう。毎週が楽しみで仕方ないんだよ」

「そこで俺がネタばれになることを言ってさらに楽しみを増してやるよ」

「ひどい。ひどすぎるよ、この人」

「まあネタばれたほうが楽しめる場合もあったりするかな」

「ない。そんなものは絶対ない」

「原作しってる作品だったらどうするんだよ」

「アニメ化ばんざい」

「じゃ、この話し終わりな」

「なんだかもやもやする」

「まあ私の場合は劇場版も気になるな。ほんといつやるんだろうな、

アレ」

「何のこといってるのか分からないですけど、話がずれてますよ」

「こんなものだと思うけどね、いつも」

「それはそうですね」

「とりあえず何をしたいか聞いておくか」

「いや、前も話したけど別に何も意見なんてでなかったじゃないですか」

「それもそうだな」

「とりあえずこちら辺の制覇って言うのからですよ」

「そうだな。こんなところでこんなことしている場合じゃないな。

すぐに行くか!」

「ここに集合って、部長が言ってきたんじゃないですか」

「すぐに出るぞ、準備をしろ」

「無視されました」

「まあ、何もしないよりもいいんじゃないかな」

「そうですね。まあいいですけど」

そうしてすぐに外に出て、制覇という名の遊びまわるだけの日が始まった。

妹と普通の日

黒崎花梨は、怒っていた。

「何で夏休みなのにどこにも連れて行ってくれないのかな？お兄ちゃん？」

かなり理不尽なことで、怒っていた。

「部活があるって言っただろ」

「少し休んだっていいじゃん、って言うか何してるの？その部活」「いろいろしてるんだよ」

正直に言えるはずが無いくらいにダメな部だ。

「あーあー。可愛いそうだな、こんなにかわいい妹なのに、可愛いそうだなー」

「自分でかわいいとか、言うなって……」

「まあまあ、本当のことは言っておかないとね損じゃん」

「はいはい。かわいい、かわいい」

「じゃあどっか連れてって」

「分かったよ。今週は無理だけど来週になったら何とかするから、それでいいよな？」

「まあ、しかたないかな。うん、いいよ。このかわいい妹と一緒に出かけられるんだからそれはもう幸せだよね？お兄ちゃん」

「はいはい。幸せですよ、本当に」

「まったく、彼女のいないお兄ちゃんのために一緒にデートしてあげるって言うのに、もっと感謝してもいいんじゃないかな？」

「余計なお世話ありがとう」

「もっと正直にならないとだめだよ？こんなかわいい妹とデートなんだから」

「何回言ってもりだよ、まったく……」

しかし、残念ながら本当に残念なことに、このやりとりは続いた。「じゃあ楽しみにしてるね。お兄ちゃん」

「ああ、はいはい。そのうちな」

「そのうちじゃなくて、来週でしょ？お兄ちゃん」

「ああ、そうそう。来週な」

「もう、ダメだなー。今のうちに行く場所も決めておかないとダメだなこれはもう」

「どういうことになってるんだ……」

「夏といったら、海ですー!!」

「まあ、そうだな。でも、もう俺はプールに行ったからな」

「分かってないな、お兄ちゃんは、全然分かってないよ本当に。プールと海じゃ、全然違うんだよ。それはもう、海と山くらいに違うんだよ」

「ほんとに全然違うな」

もう違うというか、真逆というか。そもそもが違うというか。

「じゃあ、もう海と山でいいや」

「いや、ちよっと待て。何でそういうことになったんだよ」

「あれ、もしかして聞いてなかったのかな？お兄ちゃん」

「聞いてないとかじゃなく、言っただろそんなこと」

「でももう決定だから、おねがいね。お兄ちゃん」

「ぐっ。わ、わかったよ。ったく」

「うん。それじゃいろいろとよろしくねー」

「うん？いろいろって？」

「店の予約とか、いろいろ」

「ああ、そうか……って、この時期に空いてるのか?!」

「知らないけど、がんばれお兄ちゃん。それじゃあねー。お兄ちゃん」

そうして、彼女は自分の部屋に戻っていった。とりあえず、機嫌が戻ったことだけはよかった。

「それじゃあ、予約か……絶対空いてる場所なんか無いよな、どうするかな」

そして、少し考えた後に、部長にメールをすることにした。でも、

どこに行くか分からないんだよな。それでもとりあえず、遠出する
つていうに妹も連れて行っていいですか。こんな感じでいいか
な。ただ、来週になるかは分からないけど。それでも少しは妹が静
かになるんじゃないかと思いついた。そして、しばらくして返信
が来た。たった一言で、べつにかまわないが。とあった。さっそく、
妹に報告すべく立ち上がって、妹の部屋に向かった。

移動日

この日キタク部は電車である場所に向かっていた。部長が言っていた遠出の話の場所で、妹も一緒に行ってもいいかと聞くと次の日には、すでに日にちまでもが決められていた。

「いやあ、ひさしぶりだね。花梨ちゃん。覚えてる？」

「はい。もちろんですよ、薫さん」

この二人は昔に会ったことがあったのですぐにいつも通りになった。

「さあ、それではさっそく出発だ！！」

そう言われて現在、よく分からないままこの電車の中にいるという事になっている。

「これからどこに行くんですかね？」

「さあ、部長も言ってくれないしね」

肝心の行き先について部長は秘密だとしか言ってくれていない。外の風景からして、山のほうであることぐらいしか今のところ分からない。

「いやそれにしてもまさか、これほどかわいらしい妹がいたとは、知らなかったぞ」

「まあ、言うほどのことでもありませんでしたし」

「普段はさぞかわいがっているのだろうな。彼女を見ているとよく分かるぞ」

いえ、それは見間違いです、とはもちろん言わなかったが、別にそこまでかわいがっているわけではもちろん無い。

「それよりも部長。これからどこに行くんですか？そろそろ教えてくださいてもいいんじゃないですか？」

「そうだな。もう、半分は過ぎただろうからな」

いや、まだ半分しか過ぎていないのか。

「これから私の別荘に向かう」

「別荘？」

「ああ、そうだ。なんせ山の中にあるからな年に何度も来れないんだ。だから今回は、みんなと一緒に行くことにした」

「いやよく分からないですけど」

「すぐに分かるだろう。色々とな……」

そんな意味深なことを部長が言ったときにちょうどトンネルに入った。だから、その事を詳しく聞くことは出来なかった。

「長かったね、さっきのトンネル。ねえ、お兄ちゃん？」

「ん？ああ、そうだな。結構長かったな」

「ほう。お兄ちゃん、か……」

「え？」

「ところで、お兄ちゃんは……」

「いや、部長それは……」

「ん？どうした、お兄ちゃん？」

「それだけは許してくださいお願いします」

「まあこれ位にしておくか」

「お兄ちゃんは妹好きなのであたしじゃないと萌えないんですよ」

「おまえ、もうそれ位にしておけ」

そんなことがしばらく車内で続いていた。

「さあ、着いたぞ。みんな起きろ」

いつの間にかほとんどのメンバーが眠りに落ちていた。

「やっと着いたんですか？」

「ああ、まあしかしここからまた少し歩くことになるがな」

駅から出て外に出てみると、あたり一面が緑でおおわれていた。

「すごいですね」

「ほんとすごいいね」

「さあ、歩くぞ」

「それで、ここからどれくらい歩くんですか？」

「そうだな……日が暮れるころまでには着きたいな」

「えつと？今が午後の2時だから……」

「まあ、そういうことだ」

かなりキツメのハイキングになりそうだ。

「お兄ちゃん、おんぶしてー」

「お前は今いくつなんだよ」

「二人は本当に仲がいいんだな」

「そうですね」

「でも私的には、弟のほうが……」

「そこ、聞こえてるから。変なこと言ってるな」

「ずいぶん歩いたと思うんですけど、まだですか？部長」

「もう少しだな」

そんなことを言っていたら、少しはなれた場所に大きな屋敷のよ
うなものが見えた。

「もしかして、あれが部長の言っていた別荘ですか？」

「ああ、そうだ。まあ少し小さいかもしれないがな」

いや、ここから見てもかなりののでかさなんですけど。

「まあ、何も無いところだがな」

そうして、別荘の目の前に来たときに、もう一度驚いた。かなり
のでかさだった。しかも、入り口のところには黒ずくめの人が立っ
ている。まさか、本当に存在していたのか。

部長はごく普通にその人に話しかけ、そしてこちらを振り返って
言った。

「ようこそ、私の別荘へ」

辺りを見てみると、もう日が沈むところだった。

別荘一日目

外で見たときに感じたときよりも中に入った方が、広く感じる。

「それでは、こちらへどうぞ」

入り口のところにいたのは執事と言う本当にこの世に存在しているのかと疑うような存在だった。

「今日はもうやる事が無いからな、それぞれの部屋を用意したので休んでくれ。食事の準備ができたら呼びにこさせる」

「わかりました」

それぞれが自分たちに用意された部屋に入ってしまったが、部長は執事の人と共に歩いていった。

「とりあえず、疲れたな……」

今日は一日中歩きっぱなしだったので、足が痛い。

「お兄ちゃん、あたしも疲れたよ」

自分の部屋に入ったつもりだったが、ベッドの上にはなぜか妹が花梨が寝転がっていた。

「足揉んで」

「なんでだよ。俺も疲れてるんだよ」

「残念だけど、あたしのほうが疲れてるからね」

「まあ今日はずっと歩いていたからな、しょうがないな」

「さあ、このかわいい妹のためにマツサージを」

「はいはい。分かりましたよ」

「黒崎君、まさかそこまでのロリコン鬼畜だったとは……」

「そこの人たち何してるんですか？」

「いや、一応僕は反対したんだけどね。兄妹水入らずにしておいたほうがってね」

「それでもやっぱり、そういうことはやめたほうがいいと思います」

「ただのマツサージですよ」

「そうだよ。ロリコンだけど自分の妹に手を出すほどまでは……」

「何でロリコンは決定してるんだよ」

そんな本当にどうでもいいようなサブキャラの相手をしながらも、地味にマツサージをやり続けた。

「もつと強くてもいいよ、お兄ちゃん」

そんなことも言われながら。

「全員ここにいたのか」

その声の先を見てみると、部長がいた。いつの間にか結構な時間が過ぎていたらしい。

「さあ、食事の時間だ」

「わーい。ごちそうだー」

一番速く駆け出したのは、我が妹だった。

「ったく。あいつ……」

「かわいい妹には逆らえませんか？流石に」

「えつと、見たことの無いサブキャラの人が何でここに？」

「扱いがすごく酷い！！」

すごい部屋に案内された。もう、本当に上にはシャンデリアとかあるし、すごい豪華であろう食事だし、どれだけのお嬢様なんだ？ 普段の部長からは全然そんな感じは、感じたことは無かったのに。

「す、すごい！！」

「これはもちろん全部食べてもいいんだよね？お兄ちゃん？」

「あ？ああ、そりゃあいいだろ。食べればだけど」

「そのときはお持ち帰りだ」

「それはやめておけ」

そんなことはするんじゃない、まったくレベルの差を激しく感じてしまう。

「それでは、いただきますか」

「あ、はい。いただきます」

食べている間は静かだった。高級なお店のような緊張感がなぜか感じられる。周りに執事が立ってこっちを見てるから食べづらい。さっきの執事の人以外にもかなりの人数の執事が周りにいた。

「そろそろデザートにするか」

「待ってました。さすが部長さん」

「おまえは、本当に……」

その小さいからだのどこにそんなに入るんだと言う位に食べまくっていた妹はデザートという言葉にさらにテンションを上げていた。

「本当においしかったです。ありがとうございます」

「そうか。それはよかった。あとはゆっくり休めよ？」

「はい。そうします」

ベッドに入り、今日のことを思い出す。

「部長って、すごいな……」

いろいろすごいのは知ってはいたが、まさかお嬢様だったなんて。今日は本当に部長の知らない面が見えた一日だった。

そして、いつの間にか眠りに落ちそうになったので、着替えだけをしてお眠った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2740v/>

俺の帰宅部生活

2012年1月4日09時52分発行